

# 清月

4月中の出句 19名 延べ704句



第165号 平成26年 4月

## 俳句季題について(総論二)

季題には季を違えて存在するものや季跨りのものなどがあります。これら季題は、次のように詠みます。

ゆたか

- 年に数回ある季題  
立春(立春暦・二十四節気の元日)を基準にして後の方の呼び名を替えて詠む。  
「彼岸・秋彼岸」「雛・後の雛」「名月・後の月」など。
- 季が跨がる季題  
盛期以外の事象は、季を冠して詠む。  
「雷(夏)・秋の雷・冬の雷・春雷」「虹(夏)・秋の虹・春の虹」「耕(春)・秋耕・冬耕」「霞(春)・夏霞・冬霞」「拾(夏)・後の拾(秋)」「薔薇(夏)・冬薔薇」など
- 伝統的に新暦の月遅れ又は旧暦の事象を季題として詠むもの。  
「七夕(月遅)・盂蘭盆(月遅)・盆の月(旧暦)・月見(旧暦)・重陽(旧暦)」など
- 伝統的に季が定まりっているもの。  
「朝顔・西瓜・花火」などは、夏が盛りであるが「秋」のものとして詠む。
- 読みが同音のものは文字を使い分けて詠む  
「七種(新年)・七草(秋)」「水菜(京菜)・みづ菜(うわばみ草)」など
- その他参考事項  
新年の季題の一部は、新暦の今日においても「迎春・初春・老の春・春着」など立春暦の新年の「春」に関わる季題が詠み継がれている。

以上

十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	寸感	雜詠選	近詠	目次
睦夫	順一	伸義	しゆじ	省司	美琴	宏一	山溪	幹夫	よし子	允孝	恵山	ゆたか	ゆたか	ゆたか	
21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	3	2	

近詠

野田ゆたか

口ずさむ野崎小唄や菜の花黄  
 過ぎゆける日にち薬の夏近し  
 そぞろ歩の疏水に沿へる月朧  
 佐保川の荒き夜風に散る桜  
 長閑けしや花柄着せし犬連れて

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

古民家の裏のあちこち桑の花 千葉 清水恵山  
 アルプスの湧水の音山葵田に 同  
 巢燕の数確かめて今日終る 同  
 榛の花枝垂れ揺るるも風情かな 同  
 干潮や岩の鹿尾菜を急ぎ刈る 同  
 散つてな お水面彩る花筏 三重 後藤允孝  
 天空の城遠ざけて霞かな 同  
 春陰やうねりの高き熊野灘 同  
 移りゆく季節のはざま別れ霜 同  
 漕ぐほどに身を乗り出して半仙戯 同

子のくれし白詰草のブーケかな 吹田 池下よし子  
 満開の花のまばゆき母校かな 同  
 残花なほ龍野の旅路汀子句碑 同  
 花散るやふるさとを恋ふ八一歌碑 同  
 チューリップ赤のクレヨン塗りたくる 同  
 銀色の雨や山桜桃の花真白 岡山 橋本幹夫  
 春風に絡む八番ホールかな 同  
 舌の根の乾く間もなき万愚節 同  
 桃太郎像に御供の駅うらら 同  
 星空の海にサファイヤ蛍烏賊 同  
 村のどか鍵かける家今もなし 岐阜 石崎そうびん  
 鐘突きて淡海の春を惜みけり 同  
 一夜城一気に花の散りつくす 同

ゆるやかに寄りては離れ花筏 石崎そうびん  
 観音を巡りて湖北春惜む 同  
 夕日へと舵切る船や花霞 千葉 田村公平  
 春惜む昭和に消えし漁船団 同  
 老犬もぼそり顔出す花筵 同  
 予備校の講義始まる桜冷 同  
 醤油屋の桶干す空へ鯉幟 同  
 天空にぐいと伸びたる松の芯 愛知 足立山溪  
 仏間にも牡丹の風を入れにけり 同  
 軽暖や磴千段の鳳来寺 同  
 采を振る家康像や若緑 同  
 ベランダの卓布真白や風光る 同  
 親善の強き絆や花水木 大阪 木村宏一

かにかくにさくらさくらの祇園かな 大阪 木村宏一  
 刈跡も活気溢れて萩若葉 同  
 花冷や幹事屋台に走りけり 同  
 声掛けて何か忘れし万愚節 同  
 石楠花や幾何学模様なる蕾 三重 山口美琴  
 単線の車窓も楽し山桜 同  
 燕の巢今年も我が家忘れずに 同  
 チューリップ開いて閉じて歌ふ児ら 同  
 回覧板茶摘み体験募集とや 同  
 窓際で熱きコーヒー花の冷 千葉 筒井省司  
 空青く桜薬降る露天風呂 同  
 照れくさし優先席の春の宵 同  
 あれこれと着衣迷ひし花の冷 同

パソコンの画面いつぱい桜咲く 千葉 筒井省司  
 耕の富士に向かひて畝を盛る 静岡 渡邊春生  
 陽炎に揺れてローカル電車行く 同  
 春風やテニスボールのよく跳ねて 同  
 オートバイ桜吹雪を突つ走る 同  
 高麗門桜大樹に寄り添ふて 同  
 眉毛似の孫は今日から一年生 大阪 森戸しゅじ  
 散る花の条を描きて風に舞ふ 同  
 やうやくに五分粥となる花の朝 同  
 病室にジャズ漏れてきて花見頃 同  
 名勝を墨絵ぼかしに朝霞 大阪 山縣伸義  
 寄居虫に潮の満ち引きてふ暮し 同  
 麗かや能登に謂れの黒瓦 同

ゆつたりと自転車を押す日永かな 大阪 山縣伸義  
 野の風に遊ぶや螺髪の土筆の 島根 白根鈴音  
 柔らかき女の耳たぶ桜貝 同  
 陽だまりに猫の欠伸や夏近し 同  
 総苞のほどけて咲くや葱の花 島根 白根鈴音  
 空の色より濃く映る春の海 山梨 志村万香  
 春隣猫が水飲む音の在り 同  
 石罅玉儂く消えて老い深む 同  
 花萼が鉢にも地にも咲き始め 愛知 石川順一  
 葱坊主闇でも白を主張する 同  
 寄り添ひて今を盛りと黄水仙 鳥取 瀬尾睦夫  
 参道に葉桜の陰濃かりけり 同  
 岸により名残惜しんで花筏 愛知 駒田暉風

古民家の裏のあちこち桑の花 恵山

古民家は、昔、蚕飼を副業としていた農家でしょう。

古民家の往事の景へタイムスリップさせてくれました。

散つてなお水面彩る花筏 允孝

筏を組みつつ流れゆく様は、咲く様、散る様同様に美しい。

花筏の美しさと共に咲き誇った花の終期を惜しむ気持ち伝わってきます。

子のくれし白話草のブーケかな よし子

花でネックレス・ブレスレットなどを作る白話草(昔蒔・クローバ)。

ブーケを作ったのは女の子でしょう。

明るい野の景までが目に浮かびます。

銀色の雨や山桜桃の花真白 幹夫

雨は暗いイメージを伴うが、銀色の雨と詠みとられたことにより白花の映えた明る

い景が伝わってきました。

作句の基本である写生が見事です。

村のどか鍵かける家今もなし そうびん 村民の生活と長閑さが詩情豊かに伝わってきます。

村を出た者にとっては故郷の景を思い起

こさせてくれます。

夕日へと舵切る船や花霞 公平

港を出ると夕日へ向かって全速で進む船。

夕日・花霞・船と景が揃いすぎているようですが、作者が遠ざかってゆく船の乗組員を思う気持ちが伝わってきます。

・・・今月・気になった季語・・・

「春霞」は、単に「霞」と詠みましよう。

「春耕」は、単に「耕(たがやし)」と詠みましよう。

・・・巻頭言を参照ください・・・

## 共感一〇句

## 清水恵山 選

眉毛似の孫は今日から一年生 森戸しゅじ

刈跡も活気溢れて萩若葉 木村宏一

作業場に蛭選る音遠伊吹 石崎そうびん

桃太郎像に御供の駅うらら 橋本幹夫

仏間にも牡丹の風を入れにけり 足立山溪

リラ冷えや堂の奥なるマリア像 池下よし子

峠道背なを一押し春の風 筒井省司

春陰やうねりの高き熊野灘 後藤允孝

醤油屋の蔵より高き鯉幟 田村公平

春風やテニスボールのよく跳ねて 渡辺春生

共感一〇句

後藤允孝 選

桃太郎像に御供の馱うらら 橋本幹夫  
舌の根の乾く間もなき万愚節 同  
散る花の条を描きて風に舞ふ 森戸しゅじ  
跡残る桃山古窯山ざくら 石崎そうびん  
石鹼玉儂く消えて老い深む 志村万香  
仏間にも牡丹の風を入れにけり 足立山溪  
鶯や鳴きてひと山木霊する 山口美琴  
巢燕の数確かめて今日終る 清水恵山  
峠路背なを一押し春の風 筒井省司  
己の影へ話しかけゆく遍路かな 渡辺春生

共感一〇句

池下よし子 選

やうやくに五分粥となる花の朝 森戸しゅじ  
親善の強き絆や花水木 木村宏一  
伊吹嶺へ整列したり葱坊主 石崎そうびん  
北限に海胆割く海女の束ね髪 橋本幹夫  
鯉幟千余を掲げて村起こし 足立山溪  
入学子夢いつぱいのランドセル 山口美琴  
アルプスの湧水の音山葵田に 清水恵山  
窓際で熱きコーヒー花の冷え 筒井省司  
夕日へと舵切る船や花霞 田村公平  
陽炎に揺れてローカル電車行く 渡邊春生

共感一〇句

橋本幹夫 選

巢燕の数確かめて今日終る 清水恵山  
かにかくにさくらさくらの祇園かな 木村宏一  
鯉幟千余を揚げて村起し 足立山溪  
麗かや能登に謂れの黒瓦 山縣伸義  
酒蔵の白壁朽ちて春深し 後藤允孝  
垣根より溢れて藤の滝となり 筒井省司  
風光る砂場にダンプの忘れ物 池下よし子  
朝市の焦げて泡噴く栄螺かな 石崎そうびん  
入学子夢いつぱいのランドセル 山口美琴  
沢山の花々全て桜かな 石川順一

共感一〇句

足立山溪 選

漕ぐほどに身を乗り出して半仙戯 後藤允孝  
天空の城遠ざけて霞かな 同  
散つてな お水面彩る花筏 同  
一夜城一気に花の散りつくす 石崎そうびん  
村のどか鍵かける家今もなし 同  
単線の車窓も楽し 山口美琴  
夕日へと舵切る船や花霞 田村公平  
親善の強き絆や花水木 木村宏一  
寄り添ひて今を盛りと黄水仙 瀬尾睦夫  
巢燕の数確かめて今日終る 清水恵山



共感一〇句

木村宏一 選

ゆるやかに寄りては離れ花筏 石崎そうびん  
舌の根の乾く間もなき万愚節 橋本幹夫  
風光る砂場にダンプの忘れ物 池下よし子  
入学子夢いっぱいのランドセル 山口美琴  
アルプスの湧水の音山葵田に 清水恵山  
空青く桜薬降る露天風呂 筒井省司  
耕の富士に向かひて畝を盛る 渡邊春生  
天空の城遠ざけて霞かな 後藤允孝  
名勝を墨絵ぼかしに朝霞 山縣伸義  
寄り添ひて今を盛りと黄水仙 瀬尾睦夫

共感一〇句

山口美琴 選

親善の強き絆や花水木 木村宏一  
ゆるやかに寄りては離れ花筏 石崎そうびん  
晩年は風に任せて石罅玉 橋本幹夫  
子のくれし白詰草のブーケかな 池下よし子  
巢燕の数確かめて今日終わる 清水恵山  
仏間にも牡丹の風を入れにけり 足立山溪  
瀬戸内や島を連ねて花霞 田村公平  
春潮や出会いと別れ繰り返す 後藤充孝  
名勝を墨絵ぼかしに朝霞 山縣伸義  
八重桜古寺に名物一つあり 瀬尾睦夫

共感一〇句

筒井省司 選

老桜気高き姿とどめをり 後藤允孝  
外に出てこんな所に芝桜 石川順一  
名勝を墨絵ぼかしに朝霞 山縣伸義  
巢燕の数確かめて今日終る 清水恵山  
入学子夢いっぱいのランドセル 山口美琴  
子のくれし白詰草のブーケかな 池下よし子  
朝市の焦げて泡噴く栄螺かな 石崎そうびん  
通院の車窓にまぶし花水木 木村宏一  
晩年は風に任せて石鹼玉 橋本幹夫  
天空にぐいと伸びたる松の芯 足立山溪

共感一〇句

森戸しゆじ 選

葱坊主闇でも白を主張する 石川順一  
石鹼玉儂く消えて老い深む 志村万香  
天空にぐいと伸びたる松の芯 足立山溪  
子のくれし白詰草のブーケかな 池下よし子  
燕の巢今年も我が家忘れず 山口美琴  
アルプスの湧水の音山葵田に 清水恵山  
夕日へと舵切る船や花霞 田村公平  
天空の城遠ざけて霞かな 後藤允孝  
寄り添ひて今を盛りと黄水仙 瀬尾睦夫  
野の風に遊ぶや螺髪の土筆仏 白根鈴音

共感一〇句

山縣伸義 選

スイトピー葉陰に蝶のゐるやうに 清水恵山  
春風やテニスボールのよく跳ねて 渡邊春生  
壺焼や汐の匂へる波止場街 橋本幹夫  
参道に葉桜の影濃かりけり 瀬尾睦夫  
入船の数をかぞへて日の永し 石崎そうびん  
蝶々や風に逆らふ力あり 山口美琴  
花の風浴びる母子や車椅子 田村公平  
かにかくにさくらさくらの祇園かな 木村宏一  
沢山の花々全て桜かな 石川順一  
三歳に叱られるたり四月馬鹿 池下よし子

共感一〇句

石川順一 選

亀鳴くやことに大きな英霊碑 池下よし子  
チューリップ赤のクレヨン塗りたくる 同  
三年も売地看板松の花 同  
小窓より猫の覗ける桜草 山縣伸義  
一山が石楠花明かりなる浄土 同  
花吹雪風下となる車椅子 森戸しゅじ  
菜の花や川面を隠す丈となり 同  
山国に嫁いで目刺好きになり 渡邊春生  
仏間にも牡丹の風を入れにけり 足立山溪  
昭和の日身辺整理惜しまずに 山口美琴

共感一〇句

瀬尾睦夫 選

単線の車窓も楽し山桜 山口美琴  
漕ぐほどに身を乗り出して半仙戯 後藤允孝  
あれこれと着衣迷ひし花の冷 筒井省司  
かにかくにさくらさくらの祇園かな 木村宏一  
花びらの共に入り来る自動ドア 池下よし子  
御心は散りし万朶の夕桜 橋本幹夫  
ぼんぼりを抜け来て風は桜色 駒田暉風  
今年また二人で座る花筵 石崎そうびん  
春風を連れて少女は華やける 白根鈴音  
夕日へと舵切る船や花霞 田村公平

インターネット俳句 清月  
第165号  
平成26年4月中の出句から

発行  
平成26年 5月20日

主宰 兼 編集  
野田ゆたか

発行所  
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ  
[https://haiku575.info/seigetukai/  
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)